

隋唐時代の仏教及び造仏について

上原 一 明

Buddhism and making a Buddhist image of the Ages of Sui and Tang

Kazuaki UEHARA

(Received September 25, 2009)

はじめに

本拙論は、日本の仏教伝来及び初期の仏像に多大な影響を与えた隋唐時代について、造仏の観点から考察するものである。まず、隋唐代の皇帝による造仏の状況や隋代山東省雲門山石窟と駝山石窟の石仏、陝西の石窟と造仏について述べ、更に唐代の仏像に関する諸事例を挙げ、当時の造仏に関する興隆と法難の状況を検証する。

1、隋唐代の皇帝による造仏

(1) 隋代文帝・煬帝における仏教と造仏

「三武一宗の法難」の一つに数えられる北周武帝により建徳3年(574年)仏法は乱れ、その混乱は関内及び長江流域にまで及んだ。4年後には北齊が滅び(578年)大河の南北の寺院は無法地帯と化した。江南の侯景の乱以後状況は変化し、陳(南朝)代の仏法は梁の時代ほど盛んではなかった。仏教は、隋の高祖により再興することとなる。隋の高祖、即ち楊堅(在位581年～604年)の誕生は、仏法の力を信じ保護・維持する者が現れるという言葉伝えのとおりとなった。¹

「皇帝昔在潛龍、有婆羅門沙門來詣宅、出舍利一裹曰…『壇越好心、故留與供養。』沙門既去、救之不知所在。……始作七寶箱以置之。神尼智仙言曰…『佛法將滅、一切神明令已西去。兒當為普天慈父重興佛法、一切神明還來。』其後周氏果滅佛法、隋室受命、乃興復之」
《廣弘明集》卷第十七王劭《舍利感應記》²

近年宝鶏で1尊の楊堅が所有していた銅製レリーフの三尊像が発見された。「楊堅造銅仏像」(陝西歴史博物館蔵)である。当時彼は北周の大司馬に任ぜられていた。銅仏像は高さ27.5cmで釈迦如来と脇時に菩薩像が浮き彫りにされており、その裏には仏塔が刻まれている。そこに宣政元年(578年)大司馬楊堅は仏伝故事並びに発願文と共に仏法像を造る、と彫り込まれている。彼が皇帝になる3年前の事である。仏法が乱れていた最中、この仏像を造っていたという事実は、仏教に対する彼の深い信仰を意味する。30cm弱の板状のレリーフ三尊像である為、携帯に便利である。戦乱の中、いく度かの戦闘の際にも馬上の鎧の中に入れて戦っていた可能性もある。

即位後、楊堅は天下に仏法の復興を宣言し、仏像を造る為、多くの予算を宛がった。彼の絶大な支持と施政により、仏教は空前の発展へと向かう。³

以下「法苑珠林」第百巻による隋の文帝、煬帝各時代の寺院数や僧の数、仏像数である。

隋の文帝は、百余りの州に舍利塔を建立。度僧尼230,000人、立寺3,792カ所、写経46蔵、

132,086巻、修故経3,853部、造像106,582軀、その他不明。

隋の煬帝は、修故経6,112蔵、29,172部、修繕像101,000軀、新造像3,850軀、度僧6,200人。

隋の二代47年間で、寺3,985ヵ所、度僧尼236,200人、訳経820,000部に及ぶ。⁴

更に唐初の人法琳の著した「弁正論」には、文帝の業績について以下のように記されている。

僧尼を度すこと230,000人、海内諸寺の造立3,792所、書写の経論46蔵132,086巻、故経を修治すること3,853部、金銅檀香夾紵牙石像を造ること大小106,580軀、故像を修治すること158,940許軀、宮内常に造り刺す繡成像及び画像、五色珠幡等称計すべからず。⁵

と数え上げられている。

隋文帝在位24年の間に年間約164箇所もの寺院が建立され、一寺院平均28軀の新造の仏像が安置された。煬帝代では修繕された仏像に加え、新たに建立された寺院に合わせるかのように、仏像も新たに造像された。隋朝37年間を通してやはり一寺院平均28軀の仏像が安置されていたことになる。

ここで、修繕された仏像の数に注目したい。文帝の時代に修繕されて仏像が、158,940軀余り、煬帝の時代に修繕された仏像が101,000軀とある。この修繕数はあまりにも膨大である。これら修繕された仏像は、北魏の太武帝及び北周の武帝らの廃仏により破壊された数多くの仏像であるとみられる。文帝・煬帝二代に渡る多くの仏像の修繕数は、これらの破壊された仏像数であると考えると、その数は259,940軀となる。その修繕された仏像の材料はいかなるものであったのかを問題視する。修繕仏の具体的記録がないため不明であるが、法琳著の「弁正論」では、文帝時代に新たに造られた仏像は「金銅檀香夾紵牙石像」とあるため、金銅像、壇像、脱活乾漆像、石像が新たに制作されたとあるが、何故かその中には塑像がない。これは何を意味するのか疑問視される。

文帝在位23年間に106,582軀、年間平均4634軀もの仏像が像造されたということは、月平均386軀造られたことになる。これほど短期間でこれだけの数を造るには、無論多くの造仏師及び工人達の動員が考えられるが、新たに造仏された仏像に使われた材料の中で、塑像だけが記載されていないのは、やはり不都合が生じた可能性を示している。

文帝の時代は開皇の治と呼ばれるほどの安定した国家運営であったので、主だった戦乱はなかった。よって人災による仏像の破壊や管理不行による劣化の心配は必要ないはずである。ならば、安心して塑像仏も制作して良いはずである。これには、以下のような理由があると考えられる。まず比較的材質的強度の高い金銅仏や石仏、木彫仏、脱活乾漆像においては、耐久性にも優れており、いずれは訪れるであろう戦乱や法難を考慮し、避難の為の搬出が比較的容易で強度の高い材料が好まれた可能性が挙げられる。文帝治世より半世紀前に建立された北魏時代の洛陽の永寧寺⁶には、敦煌の塑像とは技法の異なる制作方法で造られた数多くの塑像の残骸が発掘されている⁷ことから、塑像自体は制作されてはいたものの、安全かつ迅速な搬出が困難な塑像は敬遠されたと思われる。塑像は他の材料と比較して、その重量に対する構造的強度が弱い。したがって移動の際は非常に慎重な配慮が必要であり、迅速に像を横に倒すことは避けなければならない。敦煌のような乾燥大陸気候による比較的保存状況の良好な石窟構造と乾燥した環境、更に地方都市という戦乱による人災の少ない地勢という好条件が重なっているからこそ、多くの塑像が当時のまま原形を留めているが、関中及び首都長安は温帯大陸性気候であり、雨量が多く湿度も高い。都市部であれば、政治的改革や争いによる人災に遭い、更に安置された環境が不適切であれば、塑像は容易に劣化し風化してしまう。塑像は悪い環境の中

で2、30年も経てば修繕の必要性が出てくる。そして、現在残っている仏像の殆どが石仏であることは、材質的に軟弱な塑像の消失を物語っている。容易に移動できない塑像は、風化や幾たびかの戦乱、幾多の法難などによる廃仏政策により、木彫仏や金銅仏、石仏などよりも比較的その多くが脆くも破壊される。

文帝時代の新造仏において塑像が造像されなかった理由をまとめると以下のようになる。

- 1、いずれは起こるであろう戦乱や法難の際、迅速に寺院から取り出すときの便を考慮し、比較的強度の高い金銅仏・壇像・脱活乾漆像・石像を選定した。
- 2、首都長安及び洛陽の気候は多雨多湿性であり、塑像の維持に不適切である。
- 3、敦煌莫高窟の塑像に対する首都仏像の特色化。

第3の理由として「敦煌莫高窟の塑像に対する首都仏像の特色化」を挙げたのは、洛陽の永寧寺に敦煌の塑像とは技法の異なる制作方法で造られた塑像の存在があるからである。その塑像とは敦煌莫高窟の有芯塑像に対し、有空塑像⁸である可能性が高い。

その他、隋代仏教史の最大の事項は、関中における仏法の興隆と舍利塔の建立である。仏法の興隆は、隋の文帝の家系が北魏の鮮卑の出身であることが関係しているものと思われる。そして、舍利塔の建立は、南北朝時代の雲岡石窟の中にすでに覆鉢式塔の造形が見られるが、隋の時代にも盛んに建立された。隋の文帝は仏教を提唱し、名僧を長安に集め重鎮した。⁹

しかし、隋の文帝の時代、仏教と道教に関して様々な論争が起こっていた。李世謙の儒教・仏教・道教の三教優劣論である。彼は「仏教は太陽であり、道教は月であり、儒教は5つの星である」といい、ひとつとして欠けてはならないと論じた。更に煬帝の時代(607年)の恵浄と道士・余永通による智藏寺における論争(一説によると605年)などもあった。武徳7年には、仏教は国を害するとされ、六朝時代の分裂は全て仏法を信じたからであるといわれた。よって老荘を信じ、また儒学を尊ぶ事が望ましいとされた。しかしそれらは華夷関係について疎略であるともいわれた。(舊唐書第79巻・傳奕傳)¹⁰老子化胡説も仏教に対する道教の優位性を強調したもので、同じ性質を持つ。

(2) 唐代高祖・太宗における仏教と造仏

唐の高祖(在位618年～626年)は、早期より仏法の信者であった。隋の煬帝大業初頭より、人民のために仏像を彫ったという。その時、次期皇帝である太宗はまだ9歳であった。高祖は617年(義寧元年)の挙兵の際、仏法に福を祀っていた。618年(武徳元年)帝位に即位した後、寺を建立し仏像を造り、これら造営に関する職業を設けた。

高祖による仏教関連施設の建立及び像造所の職業化は、質の高い安定した寺院建立と仏像制作を提供したものである。いわゆる国営事業である。日本においても、奈良時代の東大寺や平安時代の教王護国寺等国営による造仏は、仏師に高い地位が与えられ、多くの流派による競争作用と制作技法の伝授が、より高い造形美を発展させた。同様に高祖の時代も非常に質の高い仏像が制作されたものと思われる。更に太宗時代(在位626年～649年)の僧数は70,000人弱、寺院数は3,716箇所であったことから、高祖に続き仏教を手厚く保護した。当然国営による造仏が数々の傑作を生んだものと思われる。

唐の時代に像造され、日本に請来された仏像が、京都の教王護国寺内宝物館に安置されている。国宝・兜跋毘沙門天立像である。日本には、平安初期に唐から伝わり、平安京の羅城門上に安置されていたといわれる。通形の毘沙門天と異なる兜跋毘沙門天は、西域の兜跋国に出現したといわれ、王城鎮護のために城門に安置される。正面に鳳凰、その左右の側面に宝棒を持つ

て立つ人物を薄肉彫する宝冠、外套風の特殊な金鎖甲、両手に海老籠手、脛にも海老状の脛当を付け、地天女の上に立つことなどが特徴である。この兜跋毘沙門天立像は、もともと平安京の正門、羅城門の楼上に王城の守護神として祀られていた。羅城門は東寺と西寺の間に築造された平安京の入口であるとともに平安京鎮護のための軍事上の要衝であった。この羅城門を守護するものとして本像が安置されていたが、980年の台風により羅城門は倒壊し、その際、近隣のよしみで東寺に運び込まれたのが、そのまま東寺に祀られることになった。

この唐代に制作された兜跋毘沙門天立像は、盛唐から中唐にかけてのものであるとみられるが、非常に独特な造形様式を以って制作されたものであり、国営による組織的なものである。高祖から玄宗に至るまで安定的に制作が行われていたことを物語る仏像である。

2、隋代山東省雲門山石窟と駝山石窟の石仏

中国大陸には100箇所を越える石窟が現存する。いずれも歴史上仏教伝播の重要な地区である。主なもので新疆拜城克孜爾石窟、トルファン柏孜克里克石窟、甘肅敦煌莫高窟、永靖炳靈寺石窟、天水麥積山石窟、山西大同雲岡石窟、河南洛陽龍門石窟、鞏県石窟、河北邯鄲響堂山石窟、四川大足石窟、雲南大理劍川石窟などがある。¹¹

山東省益都（現・寿光市）雲門山と駝山に隋代に築かれた石窟寺院がある。隣接する歴城県にかけて多くの彫刻遺跡が存在し、仏教彫刻発展史上、雲崗・龍門と並ぶ隋代の仏像である。¹²

雲門山の石窟は崖壁の間にあり、大小5箇所の石窟に200余りの仏像が彫り込まれており、隋開皇2年から19年（582年～599年）に築かれたものである。一千年以上も経っており、自然風化や戦火による破損を免れなかったが、一部の仏像は辛うじて当初の原形をとどめている。第一窟本尊釈迦如来坐像と両脇侍の菩薩像及び、同窟内30余りの小仏像など比較的保存状態が良く、隋代中期の風格を色濃く残している。第二窟の本尊は既に無く、右脇侍の菩薩像の顔面が破損しているが、辛うじて身体の形状は残存している。

駝山の石窟も大小5箇所あり、数百軀もの仏像が彫り込まれている。北周の時代から造窟されているが、隋代に最盛期を向かえ中唐まで継続された。隋代の造窟は第二窟であり、中央に本尊の釈迦如来坐像で脇侍に菩薩像が立っている。北齊末期隋初で北魏系の特色を持つ仏像である。第三窟は駝山石窟の中でも最大である本尊釈迦如来坐像である。これも北朝の風格を持つ隋代の仏像である。その他千仏山や玉函山仏峪寺、神通寺四門塔と千仏崖、黄石崖、龍洞石窟、九塔寺千仏崖等隋唐代の石窟仏が数多く残されている。

北朝末期の東魏及び北齊の統治下、高氏の王朝は篤く仏教を信仰し、引き続き前王朝皇室以上に力を入れていた。しかし、北周の廃仏の影響を受けたが、隋楊氏による仏法の復興と促進により、山東省及び河北省・山西省・河南省の4省地域が重要な仏教彫刻圏内となった。更に都市部の寺院には、磨崖仏制作で培った石彫技術を生かした石彫仏も多く造られた。近年、青州・淄博・博興と諸城一帯で出土された石彫仏は北朝及び隋唐時代のものが多く、北周武帝或いは唐武宗の時代に廃仏され、埋められたものである可能性が高い。

石窟寺院と石仏が発掘された場所の地理的位置を確認すると、山東省の中北部と東部の一地域に限定されることが分かる。後の宋・元、更に明・清時代に入っても石仏或いは石製品の生産地は、山東省が主要地となる。天然の良質な石材が産出することも条件だが、更にこの地域で育まれてきた石彫制作の発達と石彫技術の継承が、安定的且つ完成度の高い仏像を生むことを可能とする。¹³

3、陝西の石窟と造仏

一般的に敦煌莫高窟や雲崗・龍門の石窟及び磨崖仏の知名度が高いが、当然、隋・唐の首都である長安（現・西安）周辺にも寺院の建立及び造仏が数多く見られる。

陝西省には隋代の石窟造像が現存し、造営年代の明確なものでは大業4年（608年）に造営された富県石泓寺第一窟がある。他に陝北内佳県劉国具郷顔家寺村の玉泉寺石窟などが現存する。唐代には、①彬県大仏寺石窟、②麟游県慈善寺石窟、③麟游県麟溪橋磨崖造像、④耀県葉王山磨崖造像、⑤淳化県金川湾石窟、⑥銅川市金鎖関磨崖造像、⑦旬邑県馬家河石窟、⑧麟游県石鼓峽石窟、⑨洛川県寺家河石窟、⑩郃陽県王家河磨崖造像などが現存している。中でも①の彬県大仏寺石窟は陝西最大の石窟寺院で、彬県城西10キロの河岸に面しており、古代より長安から蘭州に通じる交通の要所であった。陝西はシルクロードの北路であり、沿路には仏教造像が多く分布している。

彬県大仏寺は、唐代では応福寺、宋代では慶寿寺、明代に至り現在の大仏寺と称された。石窟は現在107箇所、その中で仏像を有するものが19箇所、そして合計約1500尊もの仏像がそれらに安置されている。中心となる大仏洞窟内の高さは31メートルあり、洞内には脇持に二菩薩を置いた、約18メートルもの砂岩を彫り出した大仏が鎮座する。結跏趺坐、左手は膝前に置き、右手は無畏印、袈裟を両側から垂らし、螺髪と低く平らな肉髻を持つ。¹⁴ ゆったりとしたボリューム感があり、下から見上げる構図が最も良い。額が高く盛り上げられており、見上げて見る時の眉の曲線が美しい。正面から見ると極端に肉髻と額が狭く、両目が異様に強調されている印象を与えるが、下から見上げる角度においては品格があり、堂々としている。これは、大仏が見上げて参拝するよう設計されていることを意味する。唐代の、特に南朝の温かみのあるふくよかな人間的風格をよく表した仏像である。

大仏洞の造営は、三尊は唐初武徳から貞観2年であり、周辺の小厨子は高宗から武周前期とされている。大仏の光背左側には「大唐貞観二年十一月十三日造」と年紀が刻まれているからである。しかし、大仏はふくよかであり初唐の作とは考えにくい。初唐は隋に引き続き北朝のほっそりとした様式を持つはずである。近年、研究者の間で三尊の形体のふくよかさを指摘し、光背の年紀は明代の偽刻であり、盛唐から中晩唐の造像であるという指摘もあり、さらに大仏洞の造営年代にも疑問点が多い。¹⁵

②の麟游県慈善寺石窟には三窟現存しており、第一窟である北窟には三尊が造仏され、北朝の様式を残している。しかし、第二窟の南窟南壁小厨子の如来像は、南朝のふくよかで均整の取れた美しい仏像である。惜しくも鼻は欠けているが、そのきりっとした目やリアルな口元などは、日本の白鳳時代（645年～710年）に通じる精神の豊かさを象徴するような趣がある。

豊かな経済力と文化を誇った長安の隋・唐時代には多くの寺院が林立し、最高水準の壁画や仏像が造られたが、千年以上を経た現在、少量の石造仏しか残されていない。陝西に現存する寺院は、主なもので大興善寺、慈恩寺、光宅寺、安国寺、楽善尼寺（温国寺）などがあり、長安には、薦福寺、資聖寺、興唐寺、西明寺、崇福寺、宝応寺、龍興寺、大莊嚴寺、永寿寺、定水寺、化度寺、静域寺、菩提寺、趙景公寺、青龍寺（靈感寺）、唐安寺など、隋・唐時代の寺院・塔及び、壁画・仏像が残されている。¹⁶

陝西省に分布する仏像の様式は当時の風俗を反映しており、北魏のほっそりとした趣とは異なり、豊満で安定感のある南朝の影響を受けた貴族趣味となっている。この様式は以後遣隋使や遣唐使による求学僧らにより日本に伝えられ、白鳳彫刻及び天平彫刻の造仏へ影響を与えることとなる。

4、唐代の仏像に関する諸事例

(1) 玄奘法師の大雁塔と請来仏

玄奘三蔵（602年～664年）は、唐代の中国の訳経僧で、三蔵法師。姓を陳、名は禪という。隋仁寿2年緱氏の陳堡谷に生まれる。嵩山少林寺の西北に移る。兄弟は4人で、法師は末子である。二番目の兄である長捷は先に出家しており、東都浄土寺に住んでいた。彼の勧めで法師は13歳で出家し、よく勉学に励んだ。武徳5年(623年)21歳の時、成都にて具足戒を受ける。¹⁷

玄奘44歳の時に西域から長安に帰国（645年・貞観19年正月24日）し、数十万人の人々に迎え入れられた。彼が西域より持ち帰った品々は、舍利150粒、金壇仏像7軀、経論520夾、657部に及ぶ膨大な經典を20頭の馬により運びこまれた。¹⁸ これらの文物は西安市・市街南方4kmの慈恩寺の大雁塔にある。慈恩寺は唐の第三代高祖（在位618年-626年）が母の文徳皇后の冥福を祈り創建したものである（648年）。¹⁹ 大雁塔は、645年の玄奘三蔵帰国後、インドから持ち帰った經典や仏像などを保存するために、玄奘が高宗に申し出て652年に建立された塔である。玄奘の建議によりインドの塔婆を模して五層の塔を建立した。おそらくブツダガヤの大塔であろう。この塔に使用された材料は、煉瓦、石灰、土、餅米で、内部を土で築き、外面に煉瓦を積んだ。一刻も早い塔の完成を待ち望んだ玄奘は、毎日早朝から晩にかけ煉瓦などの材料を籠に入れ背負って運搬したと伝えられている。塔の竣功の後、仏像を安置し慈恩寺を翻訳経院とし、經典の翻訳を11年間続けた。

大雁塔は、則天武后の長安年間（701年～704年）に大改造が行われ10層になったが、いく度かの戦乱により7層から上が崩壊している。

玄奘が長安に持ち帰った7軀の金壇仏像とは以下の仏像である。

- 1、金仏像一軀、高さ1尺6寸、マガダ国プタガボディ山龍窟留影像。
- 2、金仏像一軀、高さ3尺3寸、ベナレス国鹿野苑初転法輪像。
- 3、壇像仏一軀、高さ3尺5寸、カウサンブリ国ウダヤーナ王思慕如来像。
- 4、壇像仏一軀、高さ2尺9寸、カピタ国タサガータ下降宝階像。
- 5、銀仏一軀、高さ4尺、マガダ国鷲峰山説法華等經像。
- 6、金仏像一軀、高さ3尺5寸、ナガラハラ国伏毒龍所留影像。
- 7、壇像仏一軀、高さ約1尺5寸、ヴァイサリ国巡城行化刻壇像。

玄奘三蔵「大唐西域記」による²⁰

金銅仏と銀銅仏及び壇像仏である。2、6の金仏像など、高さ3尺3寸と3尺5寸（約1m）であるため、純金仏とは考えられない。5の銀仏も4尺（約120cm）であり、同じくこれも純銀仏であるとは考えられない。1の金仏像も含めて全て塗金・塗銀された銅仏であると考えられる。壇像仏は、白檀から一木で彫出されたものを指す。壇像は、その白檀という香木の香りを楽しむという効果とその価値判断となる。仏像の起源説話から、白檀は沈香・丁子・鬱金・竜腦と並ぶ五香の一つとして珍重されることから、また緻密な彫刻が可能な堅木であるという特性からも、白檀仏像は貴重であり広く愛され尊ばれている。『栴檀は双葉より芳し』といわれる栴檀は、白檀の別称である。古くから香りの良い木として知られる白檀は、その香りの気高さからも、仏像の素材に多く用いられている。マガダ国、ベナレス国、カウサンブリ国、カピタ国、ナガラハラ国、ヴァイサリ国と古代インドの都市にちなんだ仏像の数々を請来したことは、広範囲に広がったインド仏教の原野を見るようである。

(2) 武周朝時代の造仏

武則天（623年～705年）は中国武周朝（690年～705年）の創始者であり、唐の高宗の皇后。

姓は武。中国史上唯一の女帝となり武周を立てた。武則天の執政期間は終始仏教の発展に寄与した。先ず私組織による「華嚴教」80巻本の翻訳を行い、高僧に高い地位を与え礼遇した。

義浄（635年～713年）は、法顕や玄奘の行跡を思慕し海路にて西域へ赴いた。咸亨2年（671年）広州を出航し、25年間で30カ国余りの国を巡り、証聖元年（695年）洛陽に到着した。400部、50万頃のサンスクリットの経律論、金剛座、舍利300粒などをもたらした。武則天は、自ら洛陽の上東門外に義浄を出迎えた。

神秀（606年～706年）は、汴州（開封）陳留尉氏県出身で俗姓は李。中国禅宗における六祖で、北宗としては開祖である。武則天により長安に招かれ、仏法を広めた。

このように武則天は仏教を手厚く保護し、寺院建立と造仏に力を注いだ。洛陽郊外の龍門山奉先寺にある光背宝座を通じて高さ約20.6mの盧舎那仏の石像は、高宗の発願で造営されたが、像の容貌は武則天をモデルにしたといわれており、これが事実であれば自らの威厳を世に示す一種のプロパガンダ彫刻としての見方が出来る。そしてこの盧舎那仏は日本国奈良東大寺大仏の手本となっているとも言われている。「大盧舎那佛造像記」によれば、高宗の勅命によって唐の都長安の實際寺の僧善道禪師、法海寺主の恵暉法師が工事の計画をねり、実際の造営の大使には司農卿の韋機、副使に樊元則が選ばれた。起工は咸亨3年（676年）4月1日で、上元2年（675年）12月30日に落成した。盧舎那仏、二菩薩（約17m）、二羅漢（約12m）、二神王（約12m）、二金剛力士（約12m）合わせて9軀は、わずか3年9ヶ月で完成したのである。²¹

更に武則天は、僧人懐義に夾紵（脱活乾漆）大仏像の制作を命じた。この大仏の小指の上に数十人の人が座れるほどの大きさであったという。毎日一人もの工匠を使い、「所費以萬億計、府藏為耗竭」（億萬もの経費をつぎ込み、国家の財政は枯渇した）という。（《資治通鑑》第205巻）²² この記述が真実であれば、想像を絶する巨大な大仏であったであろう。夾紵像は当時としても大変高価な「漆」を用いるが、実制作についていえば決して不可能なことではなく、非常に現実味にあふれており興味深い。小指の上に数十人もの人が座れるとなると、少なく見積もった直径5メートルの面積で計算するとして、5,000mm：10mm（実際の人の小指）＝500：1、座高700mm×500＝350,000mmとなり、即ち座高350メートルもの想像を絶する巨大な仏像となる。少なく見積もっても約90階建ての超高層ビルに匹敵する。夾紵像は中が空洞なので、構築材は体軽量且つ丈夫な材料を用いたと思われ、竹を用いた可能性が高い。香港や上海では現在でも高層ビル外壁の足場に竹（竹棚）を用いるが、唐代においても竹は豊富であったはずである。結跏趺坐であれば、幅約300メートルの基礎を多くの巨大な石で安定させ、下部の周囲から竹網を貼ってゆき、漆を混ぜた麻布を何重にも重ねて硬化させた後、更に下部から徐々に上体、両腕、頭部と造形する。下部を分厚くし、上部にゆくほど厚みを薄くし重量を軽減することは、夾紵において造像可能である。しかし、この計画がどこまで進められていたのかは不明であるが、武則天の造仏に対する執拗なまでの執念には驚嘆する。

(3) 日本人僧・円仁が遭遇した会昌の法難

仏像は仏教の精神性を立体的に視覚化したものであり、為政者が篤く仏教を信仰していれば、大規模且つ無数の仏像が制作される。しかし時の為政者による廃仏に遭遇すると、真っ先に仏教の象徴である仏像は破壊される。日本における規模の大きな廃仏政策は、明治新政府が太政官布告「神仏分離令」（1868年）や詔書「大教宣布」（1870年）などの神道国教・祭政一致の政策による仏教施設の破壊いわゆる「廃仏毀釈」が挙げられる。また韓国においては、李朝時代の朝鮮太祖による崇儒廃仏政策が施行された。更に中国においては「三武一宗の法難」と呼ばれ

る四つの大きな廃仏毀釈が行われた。即ち北魏の太武帝、北周の武帝、唐の武宗、後周の世宗による仏教への弾圧である。このうちの唐の武宗による会昌の法難²³は、これまで築き上げられてきた仏教美術にとって打撃的な破壊であった。この会昌の法難に遭遇した一人の日本の留学僧に円仁がいる。

円仁(794年～864年)は、第3代天台座主。別名・慈覚大師。日本国最初の大師号である。入唐八家(最澄・空海・常暁・円行・円仁・恵運・円珍・宗叡)の一人。下野国の生まれで出自は壬生氏。794年、下野国都賀郡壬生町、現在の壬生寺の地に豪族壬生氏の子として生まれる。兄からは儒学を勧められるが早くから仏教に心を寄せ、9歳で大慈寺に入って修行を始めた。大慈寺の師・広智は鑑真の直弟子道忠の弟子であるが、道忠は早くから最澄の理解者であって、多くの弟子を最澄に師事させている。

仁明天皇承和年間(843年～847年)に三度にわたり遣唐使船に乗船した。初回と二回目は悪天候の為失敗したが、第三回目の承和4年(840年)6月13日に出発した船は、7月2日に揚州海陵県(現在の泰県)に到着した。江南河北を経て承和7年長安に到着した。そこで彼は、三武一宗の法難²⁴のひとつとして数えられる武宗皇帝が行った会昌の法難(廃仏)を目の当たりにしている。武宗(在位840年～846年)は道教に傾倒すると同時に、外国の宗教である仏教をはじめとするマニ教・ゾロアスター教・景教を徹底的に弾圧したのである。日本への帰国後、彼の記した「入唐求法巡礼記」第4巻には、会昌の法難について詳しく描かれており、歴史的価値のある書物として高く評価されている。

会昌5年(845年)会昌の法難が吹き荒れる最中の5月13日、円仁らを還俗される通牒が功德使から届き、僧の林宗と信観は円仁達を&州(河南省開封)まで見送った。資聖寺の都維那僧(庶務担当の僧)・法遇は、円仁に餞別として檀龕像を一軀贈った。この像は、「入唐新求聖教目録」にみえる「檀龕涅槃浄土〈一合〉」ではないかといわれている。²⁵ また、新羅人で唐の高官位高官である李元佐²⁶から以下のものが贈られている。

呉綾十疋、檀香木一つ、檀龕像二種、和香一つ、瓷瓶(陶製の瓶)、銀製の五股抜折羅一つ、氈帽二つ、銀字の「金剛經」一卷、軟鞋一足、錢二貫文。

このうちの檀龕像二種とは、「入唐新求聖教目録」の中の「檀龕西方浄土〈一合〉」、「檀龕僧伽誌公万廻三聖像〈一合〉」とあるものに相当し日本に将来されている。²⁷

更に円仁が泗州普光寺で遭遇した会昌の法難の一事件は以下のようなものである。

「この年の6月、莊園の金銭類は官人の検査が入り、寺の中は閑散としていた。聞くところによると全ての銅製仏・鉄製仏は徴収され鉄収集の役人に委ねられていた。7月、楚州では、円仁は仏像を持ち歩く勇気が無く、罪を犯すことを恐れた。8月、登州(現在の山東省煙台市)に到着すると、全ての金銅仏は当州県にその量を報告するよう勅令が出たということを知った。」(金石統編第六卷)²⁸

この記述は、首都長安から遙か東に離れた山東半島にまで、その廃仏の勅令徹底されていたという事実を生々しく物語っている。会昌の法難では、寺院4,600ヶ所余り、招提・蘭若40,000ヶ所余りが廃止され、還俗させられた僧尼は260,500人、没収寺田は数千万頃、寺の奴婢を民に編入した数が150,000人という。更に、没収した銅製の仏像や鉄製の仏像を貨幣に鑄造し直したという記録も残されている。

法難当時における像造に関しては、老子像や孔子像及び尹真人像も制作された。ここでいう老子像は、いわゆる「老子化胡説」²⁹に由来する、道教を優位にするために考案されたものであると考えられるが、おそらくこれら神像の制作は、これまで仏像を制作してきた国营造仏所

の仏師達が、老子像や孔子像を手掛けていたものと思われる。皇帝自ら仏教活動を廃止し、道教神像を制作したことは、当然その配下にある造仏所をも自由に操作することができるからである。

その後、武宗は会昌6年3月23日に亡くなり、会昌の法難は終焉した。次期皇帝・宣宗（在位846年～859年）は5月に仏教寺院の復興を命じると、再び仏教勢力が更に勢いを増した。会昌5年から唐滅亡までの70年は、帝国内部の争いや黄巢の乱により人民の生活は疲弊し、仏教勢力にも影響を与えた。後の皇帝の多くは仏教を信仰し、懿宗（在位859年～873年）にいたっては八齋戒³⁰の日を忠実に守った。大安国寺の僧達は、高らかに仏法集を詠み上げた。そして皇帝は梅檀で講座を造った。

「懿宗は国の安泰を祀り、宝座を二つ賜り、漆に金箔を貼った高さ二丈の沈壇香木による龍と鳳凰を彫刻し、上段に安置、更に陳経のいくつかの前に置き、四隅に瑞鳥神人を高く掲げ、石を敷き詰めた道に錦の絨毯を敷いた。なんとも繊細で美しい。」

懿宗はまた二つの街の四寺の度僧にそれぞれ37日間の戒壇を勅めた。外部の僧尼大徳二十人を咸泰殿に迎え、壇回内福寿の寺の尼を置いた。大蔵をそれぞれ5461巻書き写し、真の白檀を使用した壇像1000軀を制作した。（宗高僧傳第六卷）³¹

このような廃仏政策による仏像の破壊は、その宗教活動そのものの視覚的象徴であるがため、決して免れることはできない。数多くの仏像の傑作が破壊されてきたという事実は遺憾であるが、これらの破壊の大きさに対する再生の力もまた更に大きなものとなっている。そして時代の変化による教義内容の変革・発展により新たな様式が生まれ、必要に応じた造仏が行われ、更に新たな仏像制作の技法が改良を重ね発達してゆく。

(5) 隋唐時代の仏像数

隋唐の時代は中国仏教の最盛期であり、僧及び寺数は非常に多い。仏教家が誇張して記載した可能性が無いとも限らず、決して正確な数字ではないが、文献によると以下のような表になる。

帝代	僧数	寺数	付 注
隋朝	236,200	3,985	「法苑珠林」第100巻による。
唐太宗	70,000弱	3,716	寺数は「統高僧傳」第5巻による。僧数は道宣による。
唐高宗	60,000強	4,000	「法苑珠林」第100巻による。
唐玄宗	僧 75,524 尼 50,576 計126,100	5,358	「新唐書・百官志」、玄宗の時代を考慮する。寺数は「唐六典」による。
唐武宗	260,500	大寺 4,600 蘭若 ³² 40,000	「舊唐書」による。

33

仏像の造像に関して言えば、少なくとも一寺院に対し、本尊及び脇侍やその他仏法を守護する仏像が数多く制作され、安置されていたものと考察できる。例えば、隋の文帝に関する資料

に「隋の文帝は、百余りの州に舍利塔を建立。度僧尼230,000人、立寺3,792箇所、写経460,000藏、132,086卷、修故経3,853部、像造106,582軀…」とあり、単純に計算しても一つの寺院に平均28軀もの仏像が安置されていたことになる。隋の煬帝に至っては「隋の煬帝は、修故経6,112藏、29,172部、修繕像101,000軀、新造像3,850軀…」とあり、文帝時代に像造された仏像に加えて新たに制作された仏像3,850軀を合わせると、110,432軀となる。「隋の二代47年間で、寺3,985カ所、度僧尼236,200人、訳経820,000部に及ぶ。」とあることから、煬帝時代に寺は193箇所増え、単純に計算してもやはり一寺院あたり平均28軀の仏像が安置されたことになる。

奈良・東大寺の仏像は国宝に指定された主なもので、「金堂（大仏殿）」に盧舎那仏坐像、「法華堂」に不空罽索観音立像、伝日光・月光菩薩立像、梵天・帝釈天立像、執金剛神立像、金剛力士立像：阿形・吽形、四天王立像：持国天・増長天・広目天・多聞天、「戒壇院」に四天王立像：持国天・増長天・広目天・多聞天、「俊乗堂」に俊乗上人坐像、「八幡殿」に僧形八幡神坐像、「開山堂」に良弁僧正坐像、「南大門」に金剛力士立像：阿形・吽形等が安置されており、その他の仏像を合わせるとやはり30軀以上の仏像を有する。密教の京都・教王護国寺（東寺）にいたっては、「講堂」に五智如来像：大日如来、阿弥陀如来、不空成就如来、阿閼如来、宝生如来、五大明王像：不動明王坐像、降三世明王立像、軍荼利明王立像、大威徳明王騎牛像、金剛夜叉明王立像、五大菩薩坐像：金剛波羅蜜多菩薩、金剛法菩薩像、金剛業菩薩像、金剛薩埵菩薩、金剛宝菩薩像、四天王立像：持国天像、増長天像、広目天像、多聞天像、兜跋毘沙門天立像、梵天坐像、帝釈天騎象像、八幡三神坐像：僧形八幡神像、女神像等その他30軀以上を有する。

つまり隋唐の時代も現代の日本における仏教寺院と同様、規模の大小考慮しても一つの寺院には、大規模の寺で50軀程度、小規模の寺においても20軀程度、各寺特有の平均30軀前後の仏像が安置されていたことが数の上で分かる。

以上、隋唐時代の造仏について様々な事例を挙げたが、南北朝から受け継いだ西域色の濃い仏教の様式は徐々に漢化され、より中国化されていった。また、中国有史以来伝統的に受け継がれ発展してきた漆芸の技法を取り入れ、塑造の応用から発達したと思われる夾紵（脱活乾漆）像の造像方法の開発により、巨大な磨崖石造仏を上回る巨像造仏の試みがなされたという事実は、注目すべき事例である。夾紵像は中国で生み出された新しい造仏技法の誕生であると同時に、この技法が日本に伝来され、奈良・天平時代の造仏に大きな影響を与えることとなる。

(注)

- 1 「隋唐仏教史稿」湯用彤 木鐸出版社 1983年 p.1（金石萃編第40卷・大海寺唐高祖造像記；舊唐書第171卷張仲方傳・載碑像為張仲方等重修）
- 2 「陝西佛教藝術」李淞編著 藝術家出版社 1999年 p.68
- 3 同上「陝西佛教藝術」
- 4 同上「隋唐仏教史稿」 p.3
- 5 「遣唐使」森克己著 至文堂 1966年 p.7
- 6 中国・北魏の孝明帝の516年（熙平元年）に、当時の実権者であった靈太后胡氏（宣武帝の妃）が、当時の都の洛陽城内に建立した寺。孝武帝の534年（永熙3年）2月に火災に遭い焼失。

- 7 「中國佛教彫塑」(上) 李再鈞編著 台湾・国立歴史博物館 1998年 p.134
- 8 筆者の造語。詳しくは「鑑真和上と天平彫刻」第一節 鑑真和上来朝 3、第二回渡航計画時の将来品「泥塑」を参照。
- 9 同上「隋唐仏教史稿」 p.3
- 10 同上「隋唐仏教史稿」 p.10
- 11 「中國的佛教」潘桂明 台湾商務印書館 1993年 p.142
- 12 同上「中國佛教彫塑」(上) p.166 (1907年秋、日本の美術史家関野貞が雲門山と駝山以外に千仏山、玉函山仏峪寺、神通寺四門塔と千仏崖、黄石崖、龍洞、九塔寺千仏崖等、山東省を調査し、著書「南北朝及び隋唐時代の山東彫刻」としてまとめた。また、1922年春と秋にスウェーデンの美術史家オズバルド・シーレンが、山東省の寺院及び石窟を探訪し、著書「中国彫塑」の中で、益都の雲門山と駝山の石窟仏像彫刻の素晴らしさを記した。)
- 13 同上「中國佛教彫塑」(上) p.177
- 14 同上「陝西佛教藝術」 p.70~72
- 15 同上「陝西佛教藝術」 p.78
- 16 同上「陝西佛教藝術」 p.124~p.146
- 17 同上「隋唐仏教史稿」 p.21
- 18 同上「隋唐仏教史稿」 p.24
- 19 『慈恩寺三蔵法師伝』によれば “在る日、摩揭陀国のある寺に鴻の群れが飛来したが、その群れから雁が一羽地上に落下し死んだのを僧が怪しみ、その雁を菩薩とみなし、埋葬して塔を建立。ちなんで大雁塔改称した” とある。文献によると、当時は13院の寺坊があったとある。
- 20 同上「中国彫塑史」梁思成 名文書局 1987年 p.92
- 21 「雲岡と龍門」長廣敏雄 中央公論美術出版 1964年 p.158
- 22 同上「中國的佛教」 p.53~54
- 23 為政者側から「廃仏」と呼ぶが、仏教徒側からは「法難」と呼ぶ。
- 24 中国で仏教を弾圧した事件の中で、規模も大きく、また後世への影響力も大きかった4度の廃仏事件を、4人の皇帝の廟号や諡号をとって、こう呼ばれる。1、北魏の太武帝(在位:423年~452年)の太平真君年間。2、北周の武帝(在位:560年~578年)の建徳年間。3、唐の武宗(在位:840年~846年)の会昌年間。4、後周の世宗(在位:954年~959年)の顯徳年間。
- 25 「円仁」佐伯有清 吉川弘文館 1989年 p.188
- 26 李元佐の当時の役職は、左神策軍押衙(將軍)・銀青光祿大夫(従三品)・檢校国子祭酒(兼大学頭)・殿中監察侍御史(朝廷儀礼長官)・上柱国(勳一等)であった。
- 27 同上「円仁」p.191 呉綾とは、蘇州産の綾絹。和香とは、種々の香木を和して一丸としたもの。瓷瓶とは、陶製の瓶。銀製の五股抜折羅とは、五つの銚先のある五鈷杵のことで、密教の法具。氈帽とは、毛織りの帽子。軟鞋とは、柔らかい靴のことである。
- 28 同上「隋唐仏教史稿」 p.56
- 29 『史記』中の老子の伝では、老子は最後は「函谷関を出て終わるところを知らず」となっているが、この記事からまず166年(延喜9)に「老子は夷狄に入って仏陀となった」とする説(襄楷の上奏文)が生まれ、またのちには「老子は関を出てから、中央アジアをへてインドまでいき胡人を教化した。釈迦は老子の弟子である」という説(『魏略』西戎伝)

も生まれた。この説にのっとして生まれたのが、『老子化胡経』である。この経は西晋の道士王浮の作とされているが、ペリオによって敦煌で残巻が発見され、大正大蔵經に収められたものは開元年間の成立であり、王浮作のものとは別のものと考えられている。この説の成立については、一般に仏教に対する優位を主張するために老子の徒がつくり出したものとされているが、布教を円滑にするために仏教側が考えだしたものとする見解もある。『老子化胡経』は成立以来、仏道の論争のさいにはつねに争点の一つになってきたが、元の1281年（至元8）の禁断によって滅んだ。

- 30 インド仏教の術語。在家信者が一昼夜の間だけ守ると誓って受ける八つの戒律。すなわち、(1)生き物を殺さない、(2)他人のものを盗まない、(3)嘘をつかない、(4)酒を飲まない、(5)性交をしない、(6)午後は食事をとらない、(7)花飾りや香料を身につけず、また歌舞音曲を見たり聞いたりしない、(8)地上に敷いた床にだけ寝て、高脚のりっぱなベッドを用いない、の八戒である。おもに原始仏教と部派仏教で行われた。一般に在家信者は1か月に6回、日の出とともにこの戒を受け、翌朝の日の出まで守った。それゆえ「一日戒」ともいう。在家信者のいわゆる「精進日」であり、出家者に準じた修行である。
- 31 同上「隋唐仏教史稿」 p.59
- 32 非公認の小規模寺院。招提とも称される。しかしこれらの寺院に対する乱立を予め抑制することを目的とする「勅額」がある。唐朝においては、特定の寺院に勅額を下賜する制度を、国家公認の大寺に対する保護政策として行っていた。その制度の淵源は不明であるが、すでに隋代には行われていたことが知られている。
- 33 同上「隋唐仏教史稿」 p.64